

もり た ぜん べい
盛田善平

もう高い米なんか食わんでもいいぞ —ビールづくりとパンづくり—

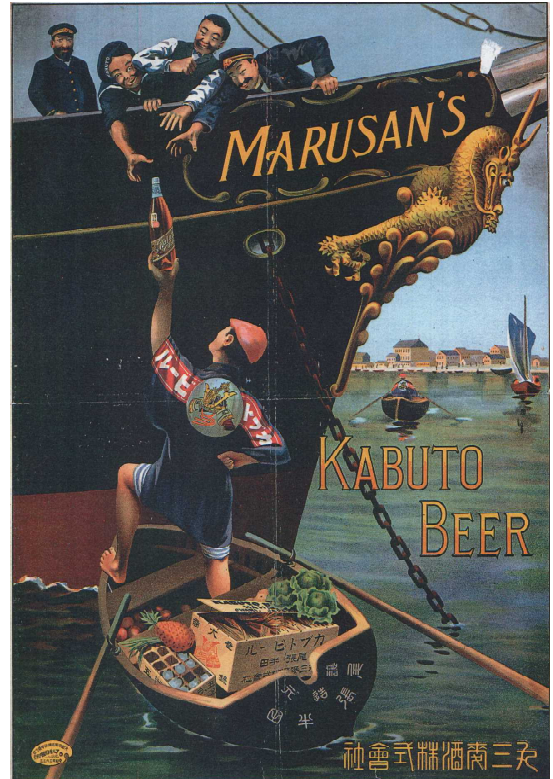


盛田善平 (1862 ~ 1937)
 出典：『敷島製パン80年の歩み』2002

■独学で学んだビール醸造

盛田善平の生家は、酒造業を営んでいたが酒税法の改正と不況で廃業した。その時期に、叔父で、醸酢家の中埜又左衛門（四代目）からビール醸造業の事業化と市場調査を要請された。上京し、独学でビール造りを学び始めた。調査の努力が実り、榎本武揚がロシア公使時代に調査、既述したビール醸造法から多くを学んだ。また、大日本麦酒の製造工場を見学し、理論と生産設備の実態把握をした。18

86(明治19)年、丸三麦酒の設立願を発起人代表としてとして提出、同年設立許可を受け、設立登記、代表者は又左衛門、盛田は常務取締役として製造販売に邁進し、紆余曲折を経て「丸三ビール」が完成した。宣伝を積極的に行い、最新の製造設備をドイツから輸入、外国人技師の招聘を行い、品質向上に努めた。これが後の「カブトビール」である。



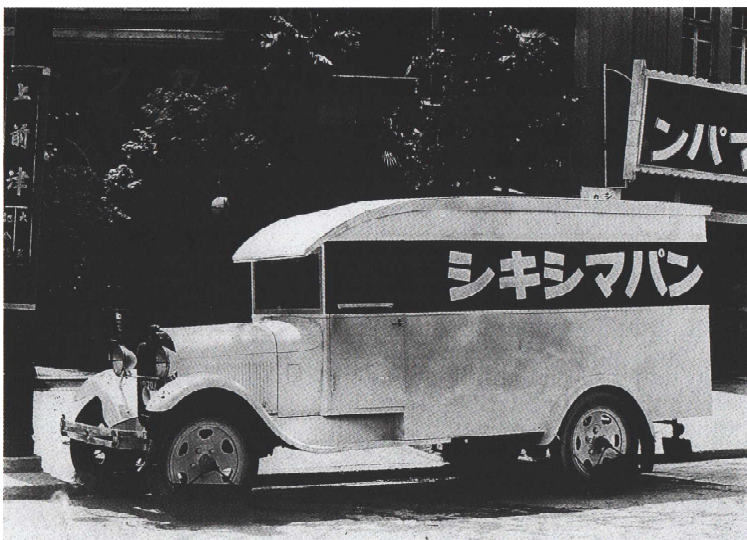
カブトビールの広告

出典：『日本のポスター史』1970

■食糧難対策で、パンづくりに乗り出す

1899(明治32)年、盛田は敷島製パンの前身となる敷島屋製粉工場を、半田市に設立、米国から製粉の機械を輸入して、米国産のメリケン粉に負けない品質の製品を作り出した。

当時、紡績業では、小麦を糊として使用していた。そこで盛田は、小麦粉の用途を食品に広げる努力をした。1918(大正7)年の米騒動に目にして食糧難を解決したいという思いがあり、パンの生産を思いつき、1919年に敷島製パンを創立した。翌1920年には捕虜から開放されたドイツ人フロイドリーブを技師長に招き、品質の向上に努めた。おいしいパンの製造に成功し、良いものを世に知らしめる手法として、盛田は宣伝



敷島パンの配達用フォード車 出典：『敷島製パン80年の歩み』2002

に非常に力を入れた。直営店では、店員に目立つ衣装を着せ、路上では、時期をよく選んでサーカス団の象を使い宣伝をしたこともあった。また、名古屋市内の店舗にパンを届けるためにパネルバントラックを導入した。白い車体に、赤帯に白抜き文字で「シキシマパン」と記載した。この車両は非常に目立った。盛田自身の自家用車も白塗りで、赤のシキシマパンの文字を入れて通勤に使用していた。

(杉山清一郎)